

# エディトリアル

揖斐郡北西部地域医療センター センター長 吉村 学

地域医療の現場で働いていて感じることは、時代も地域社会も患者も変化しているということである。高齢化、過疎化、経済問題、人材不足、医療の細分化、複雑な問題の増加など、従来はあまり遭遇してこなかった課題に直面している。従来の問題解決のアプローチが通用しなかったり、閉塞感を感じるのは私だけではないと思う。地域医療では患者だけでなく家族や地域全体もケアする視点が必要であるし、上述した変化に対応できる力が求められている。一方、医師は医療に必要な方法論を中心に学び、医学校や病院を中心とした研修を基にして社会に出ていく。当然それだけでは全ての問題の解決には対応できないし、考え方自体が対応できなくなりつつある。この解決策として T. Greenhalgh はその著書の中で、人文社会系に代表される社会学や人類学などの学問体系やそのエビデンスの活用を提唱している<sup>1)</sup>。五十嵐正紘も「五十嵐の10の軸」の中で「生態学的接近」として、多面的・学際的・有機的・総合的な思考と行動ができることを掲げている<sup>2)</sup>。つまり狭義の医療に必要な学問体系とは別の領域の考え方やエビデンス、あるいはそうした分野の人々との協働の必要性を20年以上前から説いていた。私なりに解釈すると、目の前の患者や地域に向き合う時に細分化して考えるのではなく、全体のまま、そのままを取り扱いながら、あちらからこちらから眺めながらさまざまな学問領域の成果を活用しながら捉えるということなのではないか。一人の臨床家だけでは不可能であり、多くの人々との議論や協働が必要である。しかも地元精通した各分野の人々とのネットワーク構築が突破口になるような気がしている。

では、どんな学問体系を動員したらいいのか？社会学、人類学、哲学、教育学、倫理学、経済学、心理学などかもしれない。今回の特集では全てをカバーすることはできていない。思いもつかない分野の知見や考え方が今後生きてくることもある。あらゆる可能性を排除しない、傍流を大切に、全てを受け入れる寛容さも重要なのではないかと思う。今回は経済学、社会学、教育学から4名の方々に地域医療との接点や可能性について具体的に言及していただいたのと同時に関連資料やwebsiteについてもご紹介をお願いした。

泉田信行・高柳宏史両氏には、経済学と医療の接点について機会費用を例にして解説していただいた。ヘルスサービスリサーチのエビデンスも交えながら、日々の臨床への応用や自らの地域の地域医療計画を策定するときに有用かもしれないし、地域をケアする際の考え方の柱の一つと言える。

三井さよ氏は、地域医療と社会学の接点を現場目線から鋭く解説している。病院と生活の場の論理の違いからくる違和感を、医療者自身が受けてきた教育の源泉にまで遡って述べている。ハッとさせられる切り口であり、お互いの差や多様性を理解する上で鍵となる論文と感じた。臨床家とこの分野の研究者との接点である具体的な学会等についても紹介していただいた。

相澤 出氏は、同じく社会学者で地域および在宅医療の現場で活躍されている。そのユニークでかつ先駆的な取り組みとそこから生み出されている知見は大変興味深く、日常診療や在宅医療の見方・捉え方をとても豊かにしてくれる。特にイエ、ムラ、マチといった概念の紹介や医療関係者でないということを逆に大切にしたアプローチは示唆に富む。土着の研究者であり、参与しながら実践もする現在のスタイルは今回の学際的アプローチの一つのモデルと言える。

浦崎太郎氏は、現役高校教師の観点から地域医療との接点を具体的な例(キャリア教育等)と高校教育の改革の流れも交えて言及していただいた。地域医療に将来従事する人材を育てる作業を医学部や研修病院に任せる従来のスタイルではなく、入学前の学生に対してより志を持った人材を育てる作業を、地元の高校や教育関係者そして自治体関係者との協働で仕掛けているのは注目に値する。地元こだわりの姿勢と、これまでの高校教育に対する謙虚な反省、類まれな行動力と実践からくる斬新な発想とその企画は地域医療に従事する者にとっては大いに刺激になる。

最後に臨床家の立場から木村琢磨氏には学際的なアプローチについて具体的な方法やエビデンスの検索や活用について紹介していただいた。高齢者医療の現場で積み重ねた経験から、エビデンスを幅広く渉猟するだけでなく、「人」に焦点をあてた方法論を力説されている点が素晴らしい。また病院や各種施設でのカンファレンスや教育場面での活用についてもバランスよく実践されている。

D. Schönは混沌とした現場を湿地帯、学問・研究者のいるところを高原と表現した<sup>3)</sup>。お互いに批判するのではなく、自ら率先して湿地帯からいろいろな高原へ足を運び、高原からも湿地帯へ来てもらい対話を行うことが、今求められているのではないだろうか。地元で有機的につながるような仕掛けを編み出すことを試みることは次世代の地域医療の形かもしれない。今回の特集を通じて、混沌とした現場や目の前の患者に向き合う時に役立つことを意図したが、現場で働くあらゆる専門職種にとって具体的な行動に結びつくような刺激が提供できたとすれば嬉しい限りである。

#### 参考文献

- 1) T. Greenhalgh: Primary Health Care : Theory and Practice, BMJ publishing, 2007.
- 2) 五十嵐の10の軸, その真骨頂を垣間見る. 月刊地域医学 2007 ; 21(1) : 4-12.
- 3) D. Schön : The Reflective Practitioner: How Professionals Think In Action. Basic book, USA, 1984.